



新年のご挨拶

病院長 松尾 清一

名大病院の職員の皆様、新年明けましておめでとうございます。激動の平成21年も明け、新しい年を迎えるにあたり、皆様に一言ご挨拶申し上げます。

昨年は自公政権から民主党政権へと歴史的な政権交代が起こり、これまでの日本のシステムのすべてが見直されることになりました。特に私たちが携わっている医療という分野は、勤務医不足、看護師不足、公的病院の赤字経営、などから地域医療が崩壊の危機に瀕し、多くの矛盾が露呈して、国民を不安に陥れているため、改革のための対策を早急に実行することが求められています。このような差し迫った状況の中、名大病院は医育機関として優れた医療の人材を育成するとともに、時代を拓く先端医療を開発し、かつ市民の皆様には高度で安全な医療を提供するという、いわゆる「教育、研究、診療」の三本柱の使命とともに、それを可能にする病院経営の改善、そして地域医療への貢献、という重い課題も同時に背負っています。

厳しい条件の中、職員の皆様の懸命な努力のおかげで、平成16年度の法人化以降、名大病院はこのような5つの課題を背負って活動を展開してきており、社会に大きく貢献できているものと考えています。特に昨年から中期目標に掲げた病院機能評価受審という公約を果たすために、多くの職員の皆様が真剣に取り組んでいただいております。病院長として心から敬意を表する次第です。単に審査にパスするという目的だけではなく、機能評価をきっかけに、名大病院の医療の質を一層向上させるという目標を達成できれば、皆様のご苦勞もより大きく報われるものと思います。

名大病院が今後一層の飛躍を期すために、平成22年という年は試金石になるものと思います。なぜならば、平成22年度は国立大学法人化の第2期中期計画期間(6年間)の最初にあたる年であり、2年ごとの診療報酬改定が行われる年であり、さらに名大病院



にとっては病院機能評価受審の年であり、総合周産期母子医療センターやメディカルICU設置に向けた準備を始める年でもあります。また、医療の質と安全の推進や感染対策といった病院の根幹にかかわるシステムについては、盤石の態勢を敷いておかねばなりません。

物事は最初の第一歩が大事だと思っている私は、いつも最初からどのようにダッシュをかけるか考えています。巨大な名大病院を、職員の皆様とともにどこに引っ張ってゆくのか、その答えはなかなか見いだせませんが、中部地区最大の国立大学病院として社会に大きく貢献をし、かつ世界に羽ばたく先進的な病院にすること、また職員が誇りとやりがいをもって働くことができる病院にすること、社会や患者さんの信頼を勝ち得る病院にすること、など、名大病院をより一層の高みに上げるため、頑張っていきたいと考えています。

厳しい経済財政状況のなか視界は不良ですが、粒よりの人材である皆様とともに心をつぎにできれば、素晴らしい未来があると信じています。

目次

①新年の挨拶／松尾病院長	1	⑦脳死下臓器提供シミュレーション	7
②病院機能評価について	2	⑧行事報告	8
③外来棟に今村幸生先生の絵画が展示されています	3	⑨ボランティアさん紹介	12
④臨床検査部門のISO15189認定取得への道のり	4	⑩ナディック通信	13
⑤健康講座／耳鼻咽喉科	5	⑪名大病院の医事統計	15
⑥災害医療研修を兼ねた病院防災訓練を実施	6	⑫編集後記	16

病院機能評価について

タスクフォースリーダー 湯澤 由紀夫

いよいよ本格的な冬に突入しておりますが、病院機能評価受審準備も1月末の本受審に向けてラストスパートの時期に突入いたしました。まずは、病院のすべての領域で多くの方々が、積極的に準備に参加いただいておりますことに、タスクフォースを代表して深く感謝申し上げます。

前号では、受審に向けた進捗状況の説明、機能評価ニュースや理念カードについて紹介させていただきました。そこで今号では、プレ受審の様子や前号からの進捗状況について説明したいと思います。

10月1日、2日に日本医療機能評価機構による訪問受審支援（プレ受審）を受けました。当日は、管理・診療・看護の担当領域に各1名ずつ計3名のサーベイヤー（審査員）が来られ、合同面接や部署訪問をされました。プレ受審の目的は、サーベイヤーから改善支援の助言を受けること、本審査の具体的なイメージを掴むことであり、概ねその目的は果たせたと思っております。サーベイヤーからの助言や指摘事項は一覧表にまとめられ、タスクフォース会議でその対応を検討し順次対応しているところでございます。プレ受審は2日間でしたが、本受審の日程は1月27日～29日の3日間で計7名のサーベイヤーによる審査が行われます。プレ受審と同様、患者さんにはなるべく迷惑がかからないよう行う予定です。しかし、朝から夕方までの審査のためご迷惑をおかけすることがあるかと思しますのでその際はご協力よろしくお願いします。

前号からの進捗状況ですが、まず病院職員としての

資質の向上を図る目的で接遇研修会を9月と10月に外部から講師を招いて開催いたしました。研修会には約1,400名の職員が受講し接遇の大切さを再認識するいい機会となりました。次に、機能評価受審に向けた重点事項説明



会を3回行い多数の関係職員に参加いただきました。第1回重点事項説明会は関係職員に対し、「診療録の記載方法」について行い、第2回重点事項説明会は全職員対象に、倫理研修、個人情報保護研修、接遇研修を兼ねて「職員の心得」講習会を行い約2,000名の職員が参加しました。第3回重点事項説明会は関係職員に対し、「抗がん剤の取り扱い」について行いました。12月24日には病院長のかけ声のもと病院機能評価受審決起集会を行い、機能評価受審に向けた準備がますます加速しています。

受審に向けた準備も最終段階となり、各部署でのラウンドも本審査まで繰り返し行う予定ですので、職員の皆様にはさらに一層のご協力を残り1ヶ月間よろしくお願い致します。ラストスパートもうひと踏ん張りです。

今は産みの苦しみの途中にありますが、春にはさらにレベルが上がり機能的な医療が展開される名大病院の姿を皆様と実感したいと願っております。職員の皆様の一層のご協力の程よろしくお願いします。



面接審査の様子



部署訪問の様子

外来棟に今村幸生先生の絵画が展示されています 総務課総務企画掛 小山 敬史

名大病院では外来棟の壁や診療科の受付周辺に今村幸生先生の絵画を26点展示しています。これらの絵画は今村先生から名大病院に贈呈されたもので、外来棟3階第2手術室前に展示されている「朱花金環図」、「水色の飛来」のような大きなものから各診療科の受付に展示されているものまで様々なサイズの絵画があります。皆様、名大病院にお越しの際は是非ともご鑑賞ください。

今村先生は、1935年に三重県宇治山田市（現伊勢市）に生まれ、1977年からパリに移住されました。そして、パリにて個展を14回開催し、ドイツ、アメリカ、カナダ、ベルギー等でも個展を多数開催されました。日本においても東京佐賀町E.C、大阪キリンプラザ、名古屋コージオグ

ラギャラリー等で60数回開催されました。

生まれ故郷である三重県の三重県美術館には公式収蔵作品が41点あり、伊勢現代美術館や愛知県美術館にも作品が収蔵されています。JRセントラルタワーズ、アクティシティ浜松などにパブリック・アートが展示されています。

JRセントラルタワーズのパブリック・アートは「光の塔」という高さ3.8メートルの現代的なモニュメントです。展示されている場所はJR名古屋駅中央コンコースからタワーズの2階へ続くエスカレータに乗ったさきにある「スカイシャトルホール」の端にあります。皆様もJR名古屋駅に行った際は是非ともご覧になってください。



臨床検査部門のISO15189認定取得への道のり

医療技術部長 森下 芳孝

臨床検査部門では、中期目標に掲げているISO15189認定の平成21年度内取得に向けて、平成18年後期から準備を進めてまいりました。このISO15189は「良質な臨床検査室」に与えられる認定であり、その取得により日常業務が最適なマネジメントシステムで運用されていることや部門内発信の検査結果が良質なものであることが国際的に認められることになります。

平成20年7月7日に高松純樹検査部長によるキックオフ宣言が行なわれ、毎週1～2回開催予定の「ISO企画会議」や「ISOプロジェクト会議」の他、「品質管理委員会」、「技術管理委員会」、及び「文書管理」、「内部監査」、「設備管理」、「教育訓練」、「環境管理」、「外注購買」からなる6分野のワーキンググループ(WG)が立ち上がりました。それ以降、職員全員が認定取得に向けた本格的な準備作業を行ってきました。休日を返上して、ISO規格解説セミナーやSOP作成セミナー、QMS手順書作成セミナーなどを受講したり、200有余の検査項目の標準操作手順書(SOP)作成などの文書作成に夜遅くまで取り組んだりしました。

平成21年8月27日～29日に日本適合性認定協会(JAB)による本審査が実施され、品質マネジメントシステムの運用状況調査や検査現場での技術審査が行われました。審査結果は、システムの不適合及び技術の不適合が各2箇所、システムの特記事項が6箇所、技術の特記事項が8箇所の指摘を受け、直ちにそれらの是正処置を行い、JABへ回答しました。

11月25日開催予定のJAB認定審査委員会にて合格が決定し、私としては平成21年度内の取得という目標が

達成されほっとしているところです。今回の認定で、旧帝大では、北海道大学、九州大学、東京大学に続く4番目(国立大学では、上記3大学の他、熊本大学、徳島大学、岡山大学、富山大学に続いて8番目)、全国の病院検査室・検査センターの中では49番目の取得になりました。

なお、ISO15189規格は検体検査室のみを対象としているため、生理機能検査室や病理検査室は対象外ですが、私達はISO15189の品質マネジメントシステムを同検査室にも適用し改善を図ってきました。一方、JABは平成21年度内に病理検査についてもISO15189認定審査を実施することを明言しており、当院の病理検査室も応募してありますので、こちらも年度内に技術審査を受け、うまくいけば国内第1号として認定される予定であります。

臨床検査部門は、高度先進医療を支え、臨床側のニーズに柔軟に対応できる組織体制を構築してきましたが、今後は、ISO15189に則った品質マネジメントシステムを運用することで、日々、継続的な改善に努め、以前にも増して、より質の高い検査サービスを提供していきたいと思っています。診療各科並びに関係各位のご理解とご協力をお願い申し上げます。



健康講座／胃食道逆流症と耳鼻咽喉科疾患

耳鼻咽喉科 曾根 三千彦

胃食道逆流症は胃炎や胃潰瘍に比べてあまり認知されていない疾患名です。この疾患は、胃内容物が食道内へと逆流することによって不快な症状あるいは合併症を起こす状態を指した病気です。胸やけ、ゲップ、苦い液があがってくるなどの症状がある病気です、とお話すればおわかりになりやすいと思います。

食生活や生活習慣の欧米化、肥満の増加、酸分泌の増加や高齢化により、我が国でもこの疾患が最近増加傾向にあります。内視鏡検査で食道粘膜に傷害を認める逆流性食道炎はこの疾患の代表ですが、検査では異常を認めない場合でも逆流症状が原因で生活の質（QOL:quality of life）が低下している方がいらっしゃいます。また、逆流が食道を越えて咽頭や喉頭にまで達して傷害を生じる場合があり、このような状態は咽喉頭酸逆流症とも呼ばれています。のどの違和感や声がれ、咳を主訴に耳鼻咽喉科を受診される方の中にはこの疾患が誘因となっている場合も認められます。酸を主体にした胃内容液が咽喉頭にまで直接達することの他に、咽喉頭の粘膜が酸に対して知覚過敏になっている事も症状を生じる一因と考えられています。

乳幼児は授乳後や食後にもどしやすく、逆流を伴う頻度が高いことは知られています。幸い成長に伴ってこの逆流頻度は減少してきます。授乳時の体位や逆流によって中耳炎が生じる事は以前から指摘されていますが、逆流と中耳炎の関係はあまり知られてはいないようです。

私たちの最近の調査では、成人でも胃食道逆流症によって中耳炎が生じる事が分かってきました。耳の中（中耳）にたまった液を分析すると、高濃度の胃液成分が見つかる場合があります。驚くべき事に十二指腸液の成分までも中



耳に存在している場合もあります。逆流した液が耳と鼻をつなぐ耳管を傷害して中耳炎を生じると考えられています。蓄膿症（副鼻腔炎）も逆流症によって生じうる場合があります事も報告されています。耳・鼻・咽喉頭のどの部位にも逆流によって病気が引き起こされうるわけです。

胃食道逆流による耳鼻咽喉科疾患の治療は、逆流性食道炎の場合と同様に薬の内服が主体ですが、その他に食生活の改善や食後すぐに横にならない、腹部を締め付け過ぎない、枕を高めにして寝る事も有効とされています。局所治療に加えて逆流に対する治療は、患者さんのQOLの改善にも大いに役立つと考えられます。

現在耳鼻咽喉科領域の疾患があり逆流症状をお持ちの方は、一度専門医の診察をお勧め致します。



災害医療研修を兼ねた病院防災訓練を実施

総務課臨床研修掛 大場 亮

11月5日(木)に、災害医療研修を兼ねた防災訓練(第2回地域密着型災害コース)が実施されました。

当院は平成19年度から災害拠点病院に指定され、地域の災害対策網の一員として役割を担うことになりました。この研修は、短時間に非常に多くのマンパワーを必要とする災害時に対応できる人材育成するために、昨年からは実施しています。

第2回目となる今回は、富山大学附属病院、三重大学医学部附属病院、愛知医科大学、富士市立中央病院、静岡済生会総合病院からインストラクターを招聘し、受講者38名(医師、研修医、看護師、コメディカル、事務職員)、模擬患者役18名(大学院生、事務職員)の

計56名が参加しました。

中央診療棟(3階)講堂において、最初に松尾病院長の挨拶の後、インストラクターから災害医学総論、災害医学各論、トリアージタグ記載の講義が行われ、その後5つのグループに分かれ、5カ所に設けられたスキルブース(指揮命令系統の確立、一次トリアージ、外傷治療、搬送、情報・通信)を順次廻り実習が行われました。最後にグループ実習の成果を生かし、災害を想定した全体訓練が病棟南側スペースで行われました。昨年と同様、多くの参加者から、今回の訓練は実践的で大変有意義であったという声が聞かれました。



座学の様子



スキルブースでの実習の様子



野外訓練の様子

脳死下臓器提供シミュレーション ～『おくりびと』としての医療人

移植連携室 木内 哲也

タイトルを見て、ちょっとドキッとした方もおられるのではないかと思います。正直なところ私自身も、医療現場でよく使われる『臓器』や『脳死』という日本語のもつ語感には、時々違和感を感じることがあります。それはさておき、我が国でいわゆる脳死移植法が施行され、初めての脳死下臓器提供と移植手術が行われてから、今年はちょうど10年目にあたります。10年間に脳死下で臓器を提供された方は全国でわずか80人あまり、人口あたりにすると欧米諸国の数百分の一にすぎませんが、それでも300人以上の患者さんが貴重な提供を受け、生命を救われています。名大病院でも、肝臓を中心として移植を心待ちにしている方が大勢待機しておられ、移植の機会に恵まれる方も少しずつ増えています。最近では、あまり珍しくないせいか、メディアに大きく取り上げられることも少なくなりました。

一方、全国では、これまでに多くの医療機関で脳死になった方の臓器提供が行われていますが、名大病院ではまだ行われたことがありません。こればかりは、不幸にして脳死となった方の生前の意思次第ですので、周囲の者が決めることではありませんが、最近では、生前の意思をきちんと拾い上げているかどうか、医療機関の質を測る尺度のひとつとみなされるようになっていきます。脳死下臓器提供の可能な施設に指定されて以来、名大病院ではいくつかの専門委員会が組織され、熱心な議論と準備が進められてきました。1998年9月には、手術室で実際の提供手術を想定した大規模なシミュレーションも行われています。その後しばらく間をおいて、2005年2月には名大病院で初めての脳死肝移植手術が行われ、2009年には国民的議論の末に臓器移植法の改正案が国会で可決されました。そこで、名大病院でも、10年以上に及ぶ社会と時代の変化、さらに院内組織の変化に対応するために、第2回の「院内脳死下臓器提供シミュレーション」が企画されました。

総務課の皆さんの膨大な準備作業の後、去る11月30日、脳死判定委員会、移植連携室、集中治療部・救急部、神経内科・脳神経外科、麻酔科・手術部・検査部、

事務部、さらに日本臓器移植ネットワークから約30名が参加し、『名大病院臓器提供マニュアル』に基づいた院内シミュレーションが行われました。臨床的脳死状態の患者さんが発生してからの意思確認と院内外への連絡、院内コーディネータとネットワークコーディネータの役割、2回の脳死判定の過程と関連法令・書式、さらに院外からの臓器摘出チームの集合と摘出手術からお見送りまで、実際の場面を想定した詳細な確認が約3時間にわたって行われました。奇しくも、前日の晩に始まった当院7例目の脳死肝移植手術が終了したばかりでしたので、参加者からも現実感のある再確認ができたという声がでていました。近々、この日の議論を元に一部改訂された『臓器提供マニュアル』がお披露目される予定です。

今年の夏には、改正臓器移植法が施行され、死後の臓器提供の意思をより広く拾い上げる制度が始まります。死後の臓器提供を支援することは、移植を待つ方たちの治療や故人の生前の意思を適えることに留まらず、「家族の身体の一部が生き続ける」ことで、突然の不幸に見舞われたご遺族の悲しみへの癒しとなることも少なくありません。『治すこと』『生かすこと』はもちろんですが、よき『おくりびと』であることも、医療人に課せられた大切な使命なのです。



シミュレーションの様子

行事報告

○くらんけんはうすコンサートを開催しました

医療サービス課患者サービス掛 土本 重孝

9月30日に愛知県立芸術大学大学院生の6名と企画・構成を担当された同大学講師1名による「くらんけんはうすコンサート」(患者さん向け院内コンサート)を午後3時30分から中央診療棟2階リハビリ広場で開催いたしました。コンサートには約70名の患者さんが参加し、モーツァルト作曲のオペラ「フィガロの結婚」から皆様がよくご存じの曲を歌っていただき、最後には参加者全員で赤とんぼを歌って終演しました。

皆様が心安らぐひとときを過ごされました。



○わくわくまつりを開催しました

5E看護師長 野田 弘実

院内学校では、今年も恒例の「わくわくまつり」を10月29日(木)に開催しました。

これは院内学校に通う5E病棟, 5W病棟に入院中の小中学生たちが企画, 準備して行うおまつりです。第1部は「ソーラン節」を太鼓で、「となりのトトロ」「カントリーロード」をバンド演奏で披露してくれました。第2部では、「ピコロゲーム」「ヌケヌケロケット」「君はつりたいかい」「あそんでわくわく」などのお店を開いてくれ、お母さんや、小さい子ども達、職員がゲームに参加したり、難問クイズを一緒に解いたりして、皆が楽しむことができました。お客さんたちを楽しませることができた子ども達も、とても満足そうでした。



○ボランティア活動員への感謝状贈呈式を開催しました

医療サービス課患者サービス掛 土本 重孝

11月26日(木)にボランティア活動に長年従事されたボランティア活動員に対して、病院長が感謝の意を表すため感謝状や記念品を贈呈し、その後、昼食を兼ねた懇親会を行いボランティア活動員と病院職員とのコミュニケーションを深めました。

今回感謝状を受け取られたボランティア活動員は、10年間継続された野津さんをはじめ、5年間継続された2名及び1年間継続された9名の合計12名の方達です。

野津さんは平成11年8月から活動に参加いただき、今までに2500時間以上活動され、ボランティア会長も努めていただきました。

10年間継続された野津さんと5年間継続されたお二人には、今後とも健康に気を付けて下さいという思いを込めて、それぞれ血圧計や歩数計を記念品として贈呈いたしました。



野津さんへの感謝状贈呈



病院長とともに

○メリークリスマスコンサートを開催しました

医療サービス課患者サービス掛 土本 重孝

12月15日に今年も本学医学部6年生の大森茉莉さん(ヴァイオリン)と塚崎由香里さん(ピアノ)の名コンビによる「メリークリスマスコンサート」を中央診療棟2階リハビリ広場で開催いたしました。

今回もクリスマスメドレーからクラシックの曲まで幅広く演奏され、聴衆からは「ブラボー」という歓声の声も聞かれました。120名を超す患者さんや付き添いの皆様が演奏に魅了され楽しい一時を過ごしました。

演奏者のお二人には、多くの聴衆から医師としての今後の活躍を祈って拍手をいただきました。



行事報告

○中日ドラゴンズの小山桂司捕手と浅尾拓也投手が訪問されました

経営企画課経営企画掛 土屋 有司

12月17日に中日ドラゴンズの小山桂司捕手と浅尾拓也投手が入院患者さん対象のトークショーや小児病棟に激励するために訪れました。

会場に来られた100名近い患者さん方は老若男女問わず、両選手の暖かみのある笑顔や普段聞くことの出来ないトークに癒されたり勇気を与えられたりしたようでした。トークショーでは、その場で書いていただいたサインボールや普段から身につけていたネックレスなどの貴重なグッズが抽選でプレゼントされ、当選された方は満面の笑みを浮かべていました。最後に、病院長から両選手にたくさんの笑顔と勇気を与えていただいたことに対して感謝状を贈呈しトークショーは終了しました。

その後、両選手は小児病棟の各部屋を激励のために訪れました。サイン入りグッズなどのプレゼントや憧れの選手と直接触れ合うことができ、子ども達には一足早いクリスマスプレゼントとなりました。

この日は名大病院に笑顔があふれる一日となりました。



小山桂司捕手



浅尾拓也投手



小児病棟にて

○サンタさんが病棟を訪れました

副看護部長 植村 真美

12月24日クリスマス・イヴに、“病院長サンタさん”一行が小児科病棟、老年内科病棟や外来棟に訪れました。サンタさんの一行はドラエもん、魔女、ゴジラ、ミッキーマウスやプーさん、さらにクリスマスらしくスノーマン、雪だるま、クリスマスツリー、トナカイなどの非常に賑やかな一行でクリスマスソングを奏でながら訪れ、笑顔の優しい病院長サンタさんが「早く良くなって下さいね」の言葉を添えてクリスマスプレゼントとメッセージカードをお一人お一人に手渡されました。

プレゼントを渡されて、ちょっと照れくさそうにしながらもとても嬉しそうなお子たち、ベッドの上でニコリと微笑んでくださった患者さん、外来では”病院長サンタさん”の周りに子供たちが集まり列を作りました。記念写真のリクエストも多く、ささやかながら温かさをお伝えできたのではないかと思います。



病棟にて



外来にて

○手作りクリスマスコンサートを開催しました

3E師長(QCサークルリーダー) 横山 恵

12月24日に医師と看護師を中心に「手作りクリスマスコンサート」を外来棟1階フロアで開催いたしました。

コンサートはスノーマンとトナカイによる見事な司会によって会場が盛り上がったところで、サンタの格好をした病院長によるクリスマスのメッセージで幕を開けました。

キュートな看護師によるハンドベル演奏, 医師と看護師によるバイオリンとピアノ演奏, 呼吸器内科の医師を中心としたTeam Huratsukiによるバンド演奏を行い, 最後に「赤鼻のトナカイ」, 「もろびとこぞりて」, 「きよしこの夜」を患者さんも交えて全員で合唱しました。

そして, コンサートは魔女の格好をした看護部長による“メリークリスマス”のあいさつで幕を閉じました。

150名を超す患者さんや付き添いの皆様に参加され, 沢山の笑顔があふれるコンサートになりました。



スノーマンとトナカイとサンタさん



Team Huratsuki による演奏



合唱の様子

ボランティアさん紹介

ナディックボランティア 田口 昭子

私は、平成18年3月名大病院を定年退職しました。第2の人生はこれまでの経験を生かし、1週間に2～3回位ボランティア活動を行い、社会に貢献できればと思っていました。

丁度その頃、患者さんの自立を支援する「患者情報センター・広場ナディック」が5月に開設される運びとなり、中川元看護部長から「手伝ってほしい」と云われ、二つ返事で引き受けました。

開設当初は、名大職員OBを中心とした8名のボランティアで始まりました。1日4名ずつシフトを組み、(10時～13時：2名・13時～16時：2名)対応しました。1週間に2～3回、一日中活動することもありましたが、ナディックを休業することがないよう皆で何とか調整し合いました。

ナディックでの活動内容は、利用者対応(ナディックの案内、ナディック利用カードの記入)、インターネットの鍵の管理と使用方法、アドバイス、ビデオ上映(午前と午後)、資料相談者への対応、コピー依頼者への対応、オシャレサロンの案内(かつら、補正用衣類etc)等です。

開設当初、利用者は1日に10名以下でした。うまく対応できるか心配でしたが、「病気のことがよく分かった」、「親切だった」、「明るく、静かで落ち着けた」等の言葉をいただき次への活力となりました。ナディックは看護部はじめ、各診療科、各部局の皆様のご尽力のおかげで3年経過しました。今では、利用者数は一日30～40名位で定着して来ています。ボランティア数も33名に増え1週間に1～2回の活動となっています。私がいつも心がけていることは、利用者の方が気軽に入ってこられ、気軽に声を掛け、相談しやすい明るい雰囲気作りです。

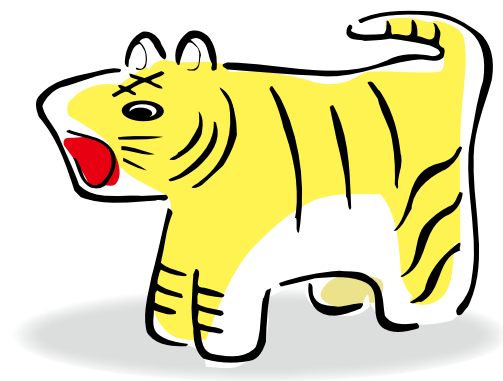
利用者の中にはリピーターも多く、毎日こられる方、退院され外来受診時に毎回来られる方もみえます。初めてで、「医学書がどこにあるか」、「どの資料を見たらよいか



分らない」と相談される方も時々あります。そのようなときは親切にご案内し、専門書、インターネット等から、一緒に情報収集し、コピーや資料を提供します。満足して帰られるときは、私も「よかった」とうれしくなります。そして、「早く元気になってください」と祈らずにはられません。

最近では、利用者の方々のニーズが多様化し、疾患はもとより、予防対策、健康管理等の資料も要求されます。各診療科、各部局からは、適時、最新情報の専門書、パンフレット、ビデオ、DVD等を納入していただいています。特にパンフレットは、家でゆっくり読めるというメリットもあり、大変好評です。で常時多くの種類があればと思います。又、イベントホールでは、月1回手作り教室、音楽療法(神経内科、老年内科各1回)、看護部による勉強会が開かれています。特に手作り教室は、広報活動のおかげで毎回たくさんの参加があり、患者さん、家族の方々のふれあいの場、癒しの場となっています。手作りの作品が出来上がって帰られるときは、皆様本当にうれしそうで、私達もうれしくなり、逆に元気をもらっています。もっとたくさんの方々に利用していただきたいと思います。

私も、健康な限りボランティア活動を続けたいと思っていますので、よろしくお願いします。



平成21年11月17日編集



ナディック通信 No.17

謹賀新年



あけましておめでとうございます。今年最初のナディック通信は、神経内科・講師 渡邊 宏久医師(ナディック運営委員)の寄稿、ナディックの「利用者ノート」、手作り教室、平成21年度4月～10月の利用者統計をご紹介します。本年もナディックをよろしくお願いいたします。



神経内科 講師

渡邊 宏久

NADICはNagoya Disease Information Centerの略です。DICには辞書の意味が込められ、患者さんが病気と健康の情報を辞書のように調べることが出来る場所となっています。

NADICには医師が選んだ図書、生活習慣病・難病をはじめとしたパンフレット、各種患者会の案内といった紙媒体の他、インターネットも整備されています。また、このスペースを利用して講演会や音楽療法等も開催されています。

NADICは平日10時から16時まで開放されています。入院中の空き時間や外来の待ち時間にお立ち寄りいただき、ご自分やご家族の病気に対する理解を少しでも深めていただければと思っています。



【手作り教室8月・9月・10月】



【8月 フェルトで作る犬】



【9月 端切れでつくる柿】



【10月 花のくす玉】

8月は「フェルトで作る犬」、9月は「端切れでつくる柿」、10月は「花のくす玉」の手作り教室が開催されました。参加された方々はご自分の好きな色を組み合わせ、見本とはまた違った味わい深い作品を作られていました。各月とも10名程度の方に参加していただきました。次回は1月13日(水)、「折り紙で作る小物入れ」の手作り教室が開催される予定です。ぜひご参加ください。

【ナディック利用者ノートについて】

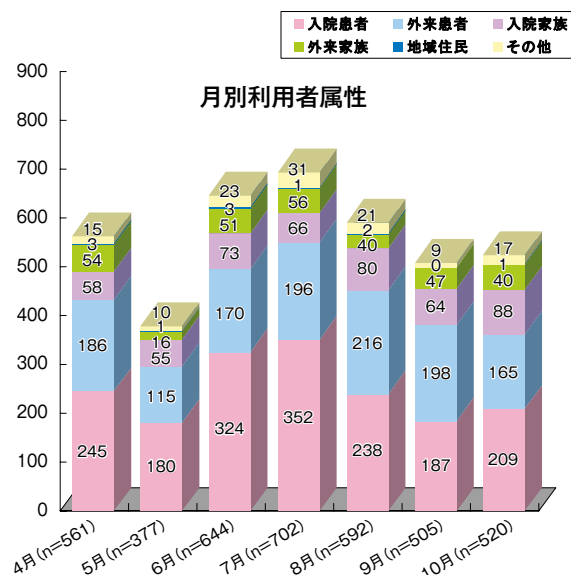
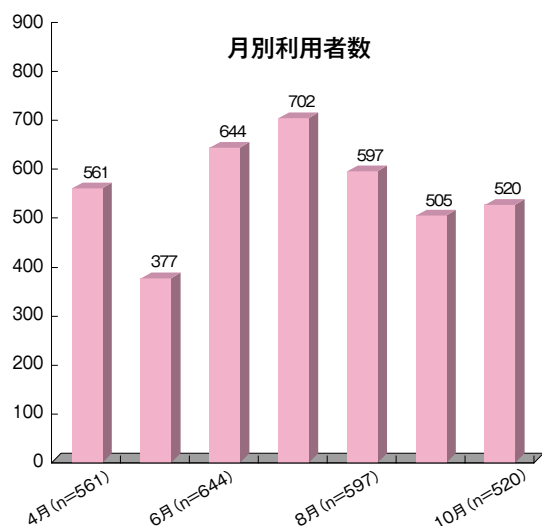
ナディックには利用された患者さんが自由に書き込める「利用者ノート」があります。その中には、様々な病気を抱える方々の、悩みやコメントが記載されています。

先日、慢性消化器疾患の方の記載で、「慢性消化器疾患用の食品を発見した。これで、これまで食べることができないと思っていた、カレーやからあげを食べることができました。ぜひ同じ疾患を抱えている人にも教えてあげたい。」というものがありました。

ナディックでは資料やインターネットで疾病のことを検索することは可能ですが、このような同じ疾患を抱えた患者さん同士の、日常生活から得た情報もお伝えできればと考えています。

これからもナディックがみなさんの情報交換や交流の場であってほしいと思います。ぜひ、ナディックに足を運んでみてください。

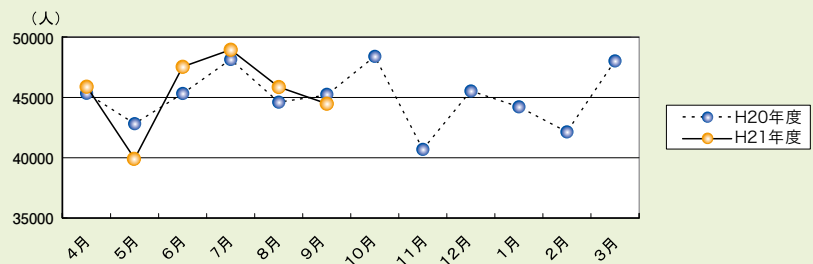
【平成21年度4月～10月利用統計】



名大病院の医事統計

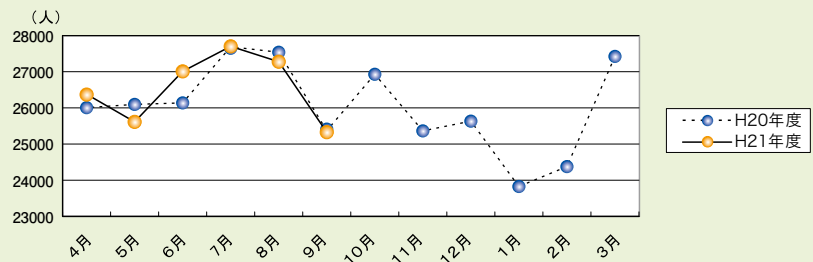
経営企画課

1. 外来患者数の推移



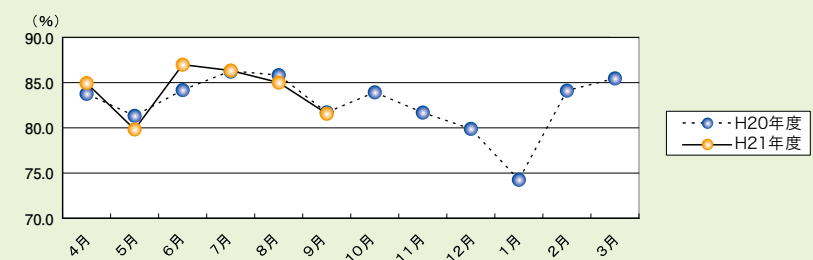
2. 入院患者数の推移

(註) 入院患者数は、在院患者延日数 + 退院患者延日数です。



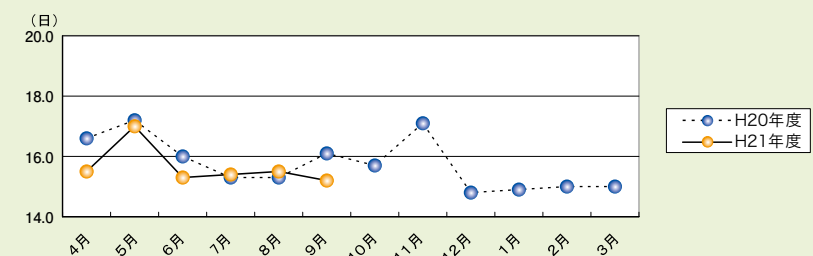
3. 病床稼働率の推移

(註) 病床稼働率の計算は、実働病床数 1015 床に対する割合です。

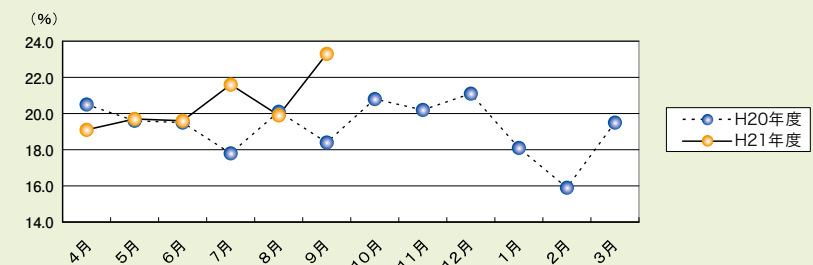


4. 平均在院日数の推移

(註) NICU, 精神病棟等を除いた一般病棟の健康保険上の平均在院日数です。

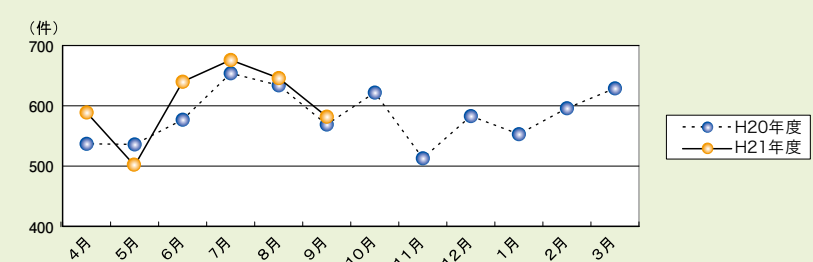


5. クリニカルパス適用率の推移



6. 手術件数の推移

(註) 中央手術室での手術件数のみです。



編集後記

新年あけましておめでとうございます。

去年は政権交代など色々なことがあった1年でした。

この『編集後記』を書いている現在でも、政権交代の影響で、2010年度予算に対する「事業仕分け」というものが行われており、医療に係る部分にどのような影響があるのか非常に気になるところです…

気になると言えば、現在、本院においては、病院機能評価の受審を進めており、この受審を通じて、病院が提供するあらゆるサービスの質の向上を図り、患者さんが安心して、質の高い医療を受けることが出来る体制作りを目指しているところです。

病院機能評価受審日が1月27日～29日に決定しましたので、次号では、合格の報告を皆様に出来るのではないのでしょうか！？

(経営企画課経営企画掛 土屋 有司)

お知らせ 『かわらばん』は、名古屋大学医学部附属病院ホームページでもご覧いただけます。
ホームページアドレス
<http://www.med.nagoya-u.ac.jp/hospital/>

かわらばん編集委員会

顧問	松尾 病院長	青山 事務部長
アドバイザー	大磯 ユタカ	
委員長	中島 務	
委員	伊東 亜紀雄	青山 裕一
	北野 俊雄	山下 一味
	稲垣 祐子	大岩 淳一
	廣川 光之	大場 亮
	土屋 有司	古川 一広
	坪井 信治	土本 重孝

No.75
医学部・医学系研究科総務課
TEL 741-2111
(内線2228)
かわらばん編集委員会
発行日 2010年1月1日